

## 『再会』 その後

（「おじさんの青春日記 その十五 十五周年記念号」所収）

### ■『再会』 あらすじ

私が小学四年生の夏休みのこと。悪ガキの私は父親の命令で、父の友人の大学教授、田井庄之助先生の自宅にひと夏預けられることになりました。田井先生は当時、四十歳前で独身、広島大学文学部の教師でした。

先生の自宅は海辺の小さな二階建ての洋館。毎日、昼食までの午前中は先生の多彩な話題による講話の時間です。先生はしばしば中国の古典、孔子や老子を私に講じるがありました。小学四年生の私に飽かせず話を聞かせるために、先生は大いに苦心されたに違いありません。しかし、十歳の少年はあまりに幼く、あまりにも無知でした。私が孔子や老子の世界にふたたび出会い、みずから理知を探り始めるにはそれからしばらくの歳月を要しました。

私が長じてのち、中国の古典にふれるようになると、あの夏の日の懐かしい古文の一節にしばしば遭遇することがありました。今振り返れば田井先生の講話は孔子の「論語」よりも、難解ながらあくまで個性的で、自由奔放な老子の発想によるものが多かった記憶があります。利の獲得や立身のための競争とは距離を置いて、歴史や茶道の世界に棲む文学部教師の田井先生は、老子の説を好んだのかもしれない。

あの夏から半世紀。いま、私の手元にある本は、もと大分大学教育学部教授、田井庄之助博士の随筆撰『曹源』。長いあいだ探すともなく求めていた師の著書をようやく手に入れました。田井先生は能や歌舞伎などを中心とした、中世、近世日本の芸能史に通曉した研究家であり、同時に茶人であり、歴史家でもありました。著書の巻末にある先生の広島大学時代の回想によると、あの洋館の近くには、森戸辰男学長や書道の井上桂園先生、山本空外博士の邸宅があったとのこと。鳴きたてる蟬しぐれにおおわれたあの古ぼけた洋館。田井先生にとっておそらく雲の上の大先輩に違いない、大学学長や碩学達の自宅もすぐ近くにあったんだ……。当代最高峰の教養人が集って住まうあの森で、無限、無尽の思索の世界がこの世にあることすら知らない一人の小学生在が、無邪気に夏の日を送っていたのです。

著者の略歴を見ると、先生は一九二二年（大正十一年）のお生まれ。八十九歳……。もう、生きてお会いすることは叶わないところにおられるのだろうか。

そして平成二十三年正月、私からの問い合わせに大分大学から一通のメールが届きました。

「田井庄之助先生、お元気でお過ごしです。ことし八九歳になられるそうです…。温暖な大分の地でゆったりと晩年を過ごしておられるようです。」

そうだ、この寒さが過ぎたら先生をお訪ねしてみよう。なかばあきらめていた、

田井庄之助先生との再会がかなう……。半世紀ぶりに出会う不肖の弟子を、老師はなんという言葉で迎えてくださるでしょうか。

※「再会」本編は、ホームページほかの「おじさんの青春日記 その十五 十五周年記念号」をお読みください。

\*

国東半島の南端から周防灘を臨む民宿を出た車は、豊後高田市を経て大分市をめざして一路南下します。車道の両脇には今を盛りの赤やピンクのコスモスの花があちらこちらに群生して、風に揺られています。晴れわたる東九州の秋の空。小学生の日以来、お会いすることが叶わず、半世紀ぶりにやっとな実現出来ることになった、田井庄之助先生との再会の旅。平成二十三年に執筆した『再会』のなかで「うぐいすの鳴く頃には……」と書いたものの、季節はもうとくに秋の盛りを過ぎようとしています。

新幹線や飛行機を乗り継いであわただしく大都会と往来する出張のたびに、仕事が目的でない自由気ままな旅をどれほど夢みたことか。

ささやかな小旅行ながら、いまそれが実現しました。

車はやがて別府湾を左に見て、あちこちに湯煙の立ちあがる温泉街を通り抜け、大分市への道に入ります。

閑静な住宅街のなかを探し歩いて、やっと田井先生のご自宅を探しあてました。大小の樹木に囲まれた住宅の中央に、昔ながらの風雅な松造りの門がありました。

田井庄之助博士は加齢のために聴力は衰えておられましたが、しっかりと五十年前の面影は残っておられました。私が小学生の頃は、長身の方、という記憶は残っていましたが、年齢とともに身長もやや低くなられたようです。私のことを「お父さんによく似ている……」と小さな声でつぶやきながら、懐かしそうに父の写真を繰り返し見ておられました。

お住まいの部屋内はいかにも歴史学者のそれらしく、たくさんの書画や陶磁器に囲まれていました。先生よりもずっとお若い奥様が、甲斐甲斐しく先生の面倒を見ておられました。その情景に何よりも安堵を感じました。

先生は四十七歳にして結婚。晩婚でした。私が小学生の時、お寺の小坊主のようにまだ独身時代の先生の自宅に預けられた時の食事のこと、私は今で

も忘れていませんよ。おかずは毎日のように缶詰と木綿豆腐でしたよね。食べ物への恨みは怖いんですよ、先生。

当時、ものぐさだったに違いない先生は着流しの和服のまま、台所と私の待つ卓袱台とを無言で往復して、無造作に食器を運んでおられました。半世紀も前のあの夏の日のことを思い出すと、奥様が分身のように先生に付き添って献身しておられる眼前の光景が、なんだか夢を見ているように思えます。

奥様は私の来訪にそなえて、茶室に「お茶」の準備を整えて待っていて下さいました。母屋から廊下伝いにある立派なお茶室で、奥様が正式な作法に則ってお茶をたて、私は正客として先生と二人揃って抹茶茶碗をかかげます。お会いすることが途絶えたのち、うち過ぎてしまった五十年という歳月。そしてこのたびのやっとの再会。老師とかつての悪童、不肖の小学生弟子は交わす口数も少なく、茶室のなかはあくまで静寂、釜湯の音がかすかに聞こえるだけ。

若い人には理解しづらいことかもしれませんが、それぞれ二者二様、著しく異なる人生の晴雨を過ごしてきた私たちは、お茶室の静けさのなか、語らずとも通じる人と人との交わりの妙を感じ合ったような思いでした。

五十年という歳月は二人の容貌を大きく変えましたが、生あらばこそその再会であり、それは私にとって神仏が与えてくださった歓喜のひとつときといえるものでした。

穏やかな秋の陽の差す縁側には、先生らしいつつましい机と椅子が置かれていました。机上には数冊の研究書とノート。田井庄之助先生は現在もなお、毎日朝九時から昼食をはさんで夕方五時まで書物を前に勉強をされているようです。すさまじいほどの学究の執念に感じ入りました。来年は九十歳になられるというのに。終わりのない学問の道の遙かさを改めて思い知りました。仏間には受章された勲三等瑞宝章の勲記とともに、著名な宗教家であり、書家でもある山本空外博士の筆による書が掲げられていました。空外博士は田井先生が若き日にまだ広島大学に在籍中、先生の旧宅のすぐ近くに住んでおられた方です。

## 柴門反蘭俗客無

墨にまみれた蛇が這ったような扁額の書体は、私にはとうてい読めません。小学生のあの時と同じように、私は先生に「読み」と「意」を質しました。先生はここぞとばかりに声を張り上げて、その意を解説して下さいました。「『さいもん　はんかん　ぞっきゃくなし』と読みますっ。粗末な柴

作りの庵いおりの門は閉ざしているが、誰もが自由に入ってこられる。立派な門ではないけれども、そのかわり、よこしまな思いをもった客もやってこない、という意味ですっ」  
先生は絞り出すような声で私に一気に語り終えました。どうやら中国・唐代の詩の一節のようです。  
「なるほど、成り金のように豪奢な屋敷に住むと、権勢目当てや物売りの客がその家の当主の権力や財力にあやかろうと、ひんぱんに訪ねてくる。質素に暮らし、真理の探究や思索に日々を過ごす人のもとには、同じ志を持つ人しか訪ねてこない。わずらわしくなくて実に結構なことだ、ということか」  
私は勝手に納得してしまいました。

人を知るものは智なり。みずから知るものは明なり。  
人に勝つものは力あり。みずから勝つものは強し。  
足るを知るものは富む。強(つと)めて行うものは  
志(こころざし)あり。

【老子】

二時間ほどの再会のひとときはあっという間に終わりました。別れ際、老師の両手をしっかりと握って、庵を辞去しました。  
おそらく今生での最後の握手となることを予感しました。



田井庄之助先生と再会してのちしばらくして、思いがけない方からのメールが私のもとに届きました。ベルギーとオランダとの国境に近い、ドイツの都市、アーヘンに在住の、田井先生の次女、美智子さんからのメールでした。美智子さんはオペラ歌手として活躍されるかたわら、アーヘン劇場学校の講師としてクラシック音楽だけにとどまらず、ミュージカルや映画音楽まで幅広い声楽の指導にたずさわっておられます。

「……………先日は、父をお訪ね下さったそうで、大変ありがとうございました。母から送られて参りましたご著書『おじさんの青春日記 再会』も、早速拝読させて頂きました。父の事をあんな風に（夏目漱石によく出て来る『先生』みたいです）書いて下さり、何だか微笑ましくて。心から嬉しかったです。父は、どちらかと言うと人の面倒を見るというよりは、逆の事の方が多いと思っておりましたので、正直信じられませんでした！

けれども、昔からそうでしたが、特にこの晩年になってから、父は人に大事にされるのです。それはどうしてなのだろうと、ずっと不思議でした。自分の行きたい道を行く、それ以外は何事もそれほど重要ではない、というだけの生き方をしてきた人だと思っていたからです……………里吉さんが父を懐かしんで下さり、『もしかしたら、今はもう、生きて会う事は叶わないところへ行ってしまったのだろうか。』と書いて下さったところで、涙が出てしまいました……

私は、一九九四年からドイツ在住なのですが、その間、数える程しか帰国していません。私は父が五十になる前に生まれましたので、父が高齢なのは承知でしたが、父は専門は違いましたが、まるで自分自身ののように、私が『自分の行きたい道を行く』のを、たいそう誇りに思ってくれ、『帰って来い』などと言った事がありませんでした……

それでも、年々老いていく父を目の当たりにして、『また来年帰って来るからね！』と別れを惜しむたびに、それから一年、こちらで暮らすたびに、里吉さんがお思ひになったような事を思ってしまうのです。また生きて会えるのかな、などと……

ですから、家族以外でも、父に対してそんな愛情を持って下さる方がいらっしやっただ、と心から嬉しかったんです！！。長い間、父を忘れないで、そして捜して下さって、本当にありがとうございました……

ご本の表紙の絵で、着物を着た長身の男性は、若かりし頃の父ですね！？五十年以上？も会ってなかったでしょうに、凄いですね！そっくりですよ！！ 父の耳と鼻が、そして全体的にも！！

ドイツにおいでの際には、是非ご連絡下さいね。何かお役に立ちたいと存じますので……………」

\*

「自分の行きたい道に行く、それ以外は何事もそれほど重要ではない、というだけの生き方をしてきた人だと思っていたからです」

という、美智子さんの父親について語る言葉はとても重く、深く印象に残ります。

「行きたい道に行く。それ以外は何事もそれほど重要ではない」境地に達するまでの道のりのいかに険しいことか。そして、選んだ道を迷わず歩み続けることがいかに幾多の困難をともしなうことか。

先生との再会が叶ってちょうど一年後の秋、平成二十四年十一月一日、大分大学から、田井庄之助元教授が前日に死去されたとの急報が私に届きました。

田井先生の九十年におよぶ道のりは終わりました。

田井先生、あなたはとても幸せな人生を歩まれた方だと私は思うのですよ。かつて幼い私に囁み碎いて教えようとされた、「老子」の教えそのものの人生だったじゃないですか。

田井庄之助先生は大分県・宇佐神宮に参詣された折りの一首の短歌を、その著『曹源』のなかに遺しておられます。

蝉しぐれこころにしみてはるかなる一すぢの道を君とのぼれり

了